

養護教諭の実践研究と養成課程における研究教育

－研究方法と発表・表現力に関する考察－

川又 俊則

要旨

実践研究を積極的に行っている養護教諭がいる。彼女たちは自らの研究を、学会大会で発表し、学会誌に論文掲載している。だが、近年、学会誌で研究の基礎を学ぶ特集が掲載された。統計ソフトの普及もあろうが、学会発表等では用いられる研究方法が偏り、研究テーマに適っているか、分析が適切かなど疑問に感じるものもある。養護教諭養成課程では、研究の基礎を確実に教える必要がある。本稿で筆者は、自らが教育する学生への指導内容を自己省察した。学生たちは、研究の進め方を方法論テキストで学んだ。また、他の研究を批判的に読解し、研究の基礎を学んだ。そして自らの研究テーマを開拓した。研究発表は1年半で4度、パワーポイントを用いた口頭発表やポスター発表を行った。この経験を通じ、表現力や情報機器を効果的に用いた情報発信力が向上した。論文執筆を通じて、学校保健や学校教育、保健教育に対する関心が深まった。養護教諭は実践研究を行うことで、表現力や情報発信力を高められる。現職者にとっても重要な仕事の一つではないだろうか。「実践研究」は放課後児童指導員が目指すものと類似する。専門性を深く追究する養護教諭として、養成課程における実践研究の基礎教育の重要性を確認した。

キーワード：実践研究，養護教諭養成課程，学会発表，情報伝達力，研究方法

はじめに

保健室における養護教諭の教育実践を分析した『教育の臨床エスノメソドロジー研究』¹⁾の意義は、10年を経た現在も減ずることはない。東京の中学校の保健室でのやりとりを会話分析の手法で考察した貴重な研究である。社会学者秋葉昌樹は同書で、養護教諭自身の研究に、日々の実践の構造を実証的に明らかにする作業が十分ではないとの課題も指摘している。

本稿で筆者は、同じく社会学の立場から養護教諭の実践研究を論ずる。

筆者は、現在、鈴鹿短期大学（以下、本学）養護教諭の専攻科（学士および一種免許状を授与する課程）で修了研究（大学学部の卒業論文に相当）を担当している。専門社会調査士であり、科目「生活統計」も担当している。学校保健等は専門外なので、その専門分野の教員と二人で担当している。

本稿は、学会誌『学校保健研究』および、専攻科の修了研究の教育自体を考察対象とする。そして、実践研究の実態を検討し、同時に、研究および発表を養成課程でいかに指導すべきか

を、指導者の一人として自己反省的に考察することが本稿の目的である。

1. 養護教諭による「研究」

(1) 森昭三の指摘

学校保健・保健教育の分野で、長きに亘って第一人者だった森昭三（日本学校保健学会理事長、日本教育保健学会会長等を歴任）は、今から20年以上前、学校保健研究の分野で、様々な研究の方法論が「きわめて無批判的」に導入されていることを憂え、当時の実態を戒める文章を発表している²⁾。そこで野村は、「研究の方法論は研究の対象や研究の目的・方針によって規制されるのが当然」であり、「何を研究問題とするかによって、研究の方法が吟味されなければ」ならないにもかかわらず、「このことを無視して、すぐれた研究方法だからといって無批判的に継承してはならない」と述べている³⁾。当時、目に余る研究が多かったからでないだろうか。森は、外国の理論や方法などの機械的な適用を厳しく批判すると同時に、理想と現実とのギャップや、素朴な問題意識を歴史的にさかのぼることを研究のヒントとして挙げている。

このような内容が「提言」というタイトルの著書で書かれていたことに、筆者はたいへん驚いた。社会学の立場で調査研究をしてきた筆者にとって、森の指摘は、研究の初歩のごく当たり前のことである。なぜ、それをわざわざ書く必要があったのか。それから四半世紀、学校保健の研究分野はどのように発展していったのだろうか。

(2) テキストにおける「実践研究」

養護教諭の免許取得のためには多くの科目を履修しなければならない。「養護概説」は、その根幹科目の一つである。

上記野村の指摘から8年後に刊行された『養護学概論』の第8章には「養護教諭と研究」という章が設けられた。後に（2014年～）愛知教育大学学長となる後藤ひとみが、自らの実践を踏まえつつ、「養護教諭にとっての研究とは何か」を述べている⁴⁾。

他の科目担当教諭と比べ、養護教諭の学界では専門性の議論が多いという印象を、筆者は持っている。他の科目担当教諭が自らの授業改善や教材研究を行う部分で、養護教諭は実践研究という方向に向き、専門性意識が研究志向と結びついているのではないかと感じている。

学校保健における大家である小倉学は、専門性の議論を1970年の単著でまとめている⁵⁾。その後、しばしば、関連学会・団体等において、「専門性」が集中的に議論されてきた。近年の例でも、日本養護教諭教育学会第12回学術集会（2004年）のテーマは「専門性を追究し発信する養護教諭を目指して」、全国養護教諭連絡協議会第20回研究協議会（2015年）の副題は「養護教諭の専門性の確立と発展を目指して」である。それ以外に幾つもある。

養護教諭にとって、「健康問題をとらえることができる」「健康問題を持つ子どもたちに必要な対応ができる」「周囲への働きかけができる」「専門職として必要な研究ができる」という4つが必要な能力として挙げられている⁶⁾。この4つ目が本稿と大いに関連する。後藤は「研究的実践」を主張し、養護教諭が行う研究は、「教育実践の中から出発し、研究成果を教育実践の

場に戻し、教育改善のために活用するもの」だと述べる。そして、研究成果に基づく実践化の試み、養護活動の基盤となる総合的基礎知識を土台に、研究のための知識・技術を学び、学校現場での適用（養護活動の実際）に至る構造を示した。彼女の整理で、第1レベルは「研究に関する知識・技術」、続く第2レベルは「研究の意味の理解」、第3レベルは「実際活動への応用」である。この能力を育成するために、主観の確立、一般的手法の理解、先行研究理解、自らの研究実践と続く。後述する本学専攻科の指導は、この第1・第2レベルを担っている。

当然ながら、研究には多種多様な方法がある。後藤は同章で、統計的手法・事例研究の併用、横断的・縦断的研究、問題発見型・問題解決型、実態調査型・仮説検証型の比較を示した。事例研究として、個別に実施した健康相談活動や保健指導報告（正しい記録、分析の柱）、観察、心理テスト（Y-G 性格検査、バウムテスト、P-F スタディ、親子関係診断など）、面接（インタビュー）、質問紙調査、生体情報、作業負荷、環境測定などを挙げて説明している。

以上、テキスト上のことだが、実践研究は養成課程段階で学ばれることが期待されている。これは、野村の指摘以降、大いに進展したことを示すものだと考えられる。

（3）『学校保健研究』誌特集「学校保健の研究力を高める」

多くの養成校教員・養護教諭が加入している学会・日本学校保健学会は、学会誌『学校保健研究』を年6冊刊行し、これまで、多くの実践研究を掲載している。また、年に1度の学会大会でも、数多くの口頭報告がなされている。

養成校教員や養護教諭が入会している全国学会としては、これ以外にも、日本養護教諭教育学会（会員約800名：学術集会2014年の協賛依頼文）や日本教育保健学会（会員234名：学会サイト2014年）などがある。それぞれ学会誌を刊行し、学会大会を開催している。日本学校保健学会が規模的にも（会員2,200名：学会サイト2014年）この学界で最大であることは、異論ないだろう。

その学会誌で「学校保健の研究力を高める」という連載記事がある（2014年10月現在、11回まで掲載済）。同誌の編集担当者など、同学会において研究の最前線にいる著名な研究者が、平易な言葉で実践研究の概要を丁寧に解説する重要な特集である（表1）^{7)~17)}。

だが他の学会でそのような特集は見かけず、異例とも思える。この特集の内容は、卒業論文（もしくは修士論文）の段階で学ぶべき「研究の作法」である。それは表1の各タイトルを見れば一目瞭然だろう。学会員たる養成校教員や養護教諭他が主たる読者の学会誌に、それが連載されること自体、学界の課題を示しているも同然ではないだろうか。これは、野村の指摘に戻るならば、結局それから20年を経ても、学界内の人びとが、研究方法等を学んでから現職に就いていると言えない証左のように思われる。学会誌投稿論文や学会発表が、編集者たちの期待する一定の水準を満たしていないことが、特集掲載の主な要因ではないだろうか。

表1 特集の連載タイトル

回数	タイトル(副題除く)
第1回	エビデンスを考える
第2回	研究を始める
第3回	文献を集める読む
第4回	データを集める
第5回	データを分析する(1)
第6回	データを分析する(2)
第7回	質的研究
第8回	結果を吟味する
第9回	研究を発表する
第10回	英語論文と付き合う
第11回	良い研究者になろう

そのためには、不採択論文を検討すればよいのだが、不採択は公表されず、外部の人間が扱うことは不可能である。次善の方法として、次章で同学会の『学校保健研究』誌（以下、本誌）の10数年分の掲載論文について、いくつかの角度で検討しよう。

2. 実践研究と養護教諭

（1）『学校保健研究』の検討

本学附属図書館開架場所所蔵の本誌13年分（2001～2013年）の原著・報告を執筆者数で分けたものが表2である。

本誌は、論文を「原著（Original Article）・研究報告（Research Report）・実践報告（Practical Report）」と区分している（他に資料、総説などがある）。

そのなかで、「原著」と「研究報告」を検討する。

表2は、「単著」「共著（2～3人）」「共著（4人以上）」という区分で示した。現職の養護教諭が大学院で学ぶことも増えてきた。その修士論文等で指導教授に指導を受け、それを投稿するような場合、その現職の養護教諭が筆頭執筆者に、指導教員は共同研究者として名前が記載されるだろう。そのような研究を大規模のグループ研究（4人以上の共著が該当）と分けた。すると、原著・研究報告とも、単著が最も少なく、共著区分ではこの2つの区分で大きく分けられることが示された。

次に、原著・研究報告の研究方法を確認しよう。量的研究（統計的手法を用いる研究）、質的研究（インタビュー、観察などを用いる研究）、量質併用、理論他と4区分すると、量的研究が8割以上だった（図1）。日本教育保健学会誌を岡田加奈子が検討したときも量的

研究が圧倒的に多かった¹⁸⁾。質的研究は看護系の学界などではテキストも多数刊行されているが、養護教諭の学界では、学会口頭発表では散見しても、論文掲載は多くないことを再確認した（参考までに社会学界で、理論・歴史・エスノグラフィ・計量との4分類で論文検討をした研究によれば、計量の論文は全体の20%以下の掲載であり、養護教諭の学界とは全く異なる¹⁹⁾）。

量的研究のなかでは、質問紙調査が多数を占めた。とくに児童・生徒・学生を対象にした集合法が多かったのは特筆したい（例えば、2003年は31本中14本、2009年は29本中11本など

表2 論文・研究報告の掲載数（執筆者数別）

巻号	年度	原著				研究報告			
		合計	単著	共著 (2～3人)	共著 (4人以上)	合計	単著	共著 (2～3人)	共著 (4人以上)
42	2001	18	6	6	6	15	2	8	5
43	2002	13	4	4	5	18	2	11	5
44	2003	11	3	6	2	20	4	4	12
45	2004	10	2	1	7	19	4	10	5
46	2005	16	3	7	6	17	7	7	3
47	2006	10	1	4	5	15	1	7	7
48	2007	16	3	5	8	8	2	4	2
49	2008	17	1	6	10	6	1	2	3
50	2009	20	3	8	9	4	2	0	2
51	2010	6	2	3	1	10	0	4	6
52	2011	15	2	10	3	7	0	5	2
53	2012	13	2	4	7	16	4	8	4
54	2013	10	3	4	3	14	3	2	9
合計		175	35	68	72	169	32	72	65

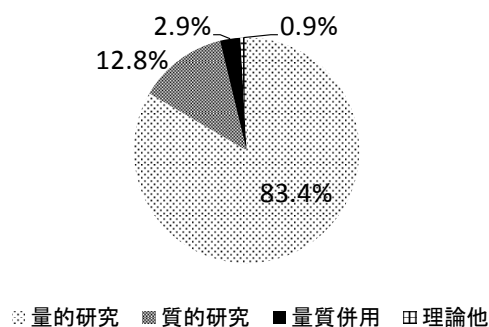


図1 研究方法の分類

3～4割がこの方法)。回収率ほぼ100%で多数を収集できるこの方法は、効率面で利点がある。また、実践研究として利用しやすい。しかし、論文内容を検討すると、研究テーマに合っているか疑問を感じたものもあった。

量的研究については、四半世紀前に野村和雄が、『学校保健研究』の論文14年分を検討し、統計的手法のうち単純な方法が多いこと、分析方法の誤用（多重比較すべきところt検定を用いるなど）、近年の意欲的な導入などを指摘している²⁰⁾。筆者の分類とは若干異なるが、そこで示された表1・表2を見ると、当時9割以上が量的研究だったことも確認しておきたい²¹⁾。

次に、短期大学の卒業研究を分析し、「学校保健の領域別」分類を示した太田静江の研究を参照しつつ²²⁾、実際に

掲載論文を内容で、筆者独自に分類したものが表3である。

一見してわかるように、多岐にわたる内容であった。

この分類によれば、心理関連、保健教育、身長体重他、疾病・怪我、喫煙・薬物他などの項目は、ほぼ毎年のように論文が掲載されていることがわかる。

これらはまさに実践研究である。また、救急処置や連携・組織などの項目が他と比較すると少ないこともわかった。

（2）放課後児童指導員の実践

筆者は、養護教諭と放課後児童指導員（以下、指導員）の養成課程の内容を比較し、共通性の一つに研究を志す点を指摘した²³⁾。いずれも「実践研究力」が必要とされていたことは興味深い。養護教諭や指導員の実践は、個々に対応するだけではなく、そこで得られた知見をさらに研究として追究することが、専門職として自らに求められているのである。

したがって、養成課程の段階から、養護教諭の場合も教職実践演習（本学の場合、養護教諭志望者は全員が卒業研究論文を執筆）を通じた研究の基礎を学び、指導員の場合も、現職講習会やテキストで実践研究を学ぶ。いずれも「実践研究」を志す専門職なのである。

放課後児童指導員の資格制度で「専門的力量」とされているのは、学童保育実践力、マネジメント力、コーディネート力、実践研究力という4つである²⁴⁾。この実践研究力は、先の養護教諭における実践研究と重なる。いずれも現場で児童等に対応し、そこで見出される問題解決

表3 内容分類

巻号	年度	身長体重他	疾病・怪我	健康相談活動	救急処置	心理関連	衛生・環境	職務・研修	保健教育	連携・組織	性行動	生活習慣	食生活・栄養	口腔・視力	喫煙・薬物他	障がい	その他	合計
42	2001	5	4	1	1	7	2	1	3		1	1	3	1	1	1	1	33
43	2002	7	2	1		4		2	2			3			7	2	1	31
44	2003	2	4	2		4	3	3	2			3	4		1		3	31
45	2004	3	1	3		5	2	1	3	2		1	2		2		4	29
46	2005	5	1	5		4			4		1		2	1	2	2	6	33
47	2006	2	7	1		1		4	2				2		1	1	4	25
48	2007	4	1	1		5	1	1	2	2			1	1	2		3	24
49	2008	2	1	1	1	2	2		2		1	1	2	2	2		4	23
50	2009		5		1	2			2		2	3	1	2	3		3	24
51	2010	2	4		1	3							2	1	1		2	16
52	2011					7		2	5	2				1	2		3	22
53	2012	1	1	4	1	4	2		3	3	1	1		1	1		6	29
54	2013	1	1	3		2	1	1	4		3		2		4		2	24
合計		34	32	22	5	50	13	15	34	9	9	13	21	10	29	6	42	344

の研究ということであろう。

3. 鈴鹿短期大学専攻科と研究

(1) 修了研究とは何か

養護教諭養成を 1968 年から行う本学では、卒業時に短期大学士（2005 年以降の学位。1991～2004 年は準学士という称号、それ以前は卒業証書授与）、養護教諭 2 種免許状を授与する。

2011 年からは、学士および 1 種免許状を授与できる専攻科「健康生活学専攻」を設置した。そのなかで、卒業論文たる修了研究の指導は、教員 2 名で担当している。完成した論文を「研究レポート」として、10 月初旬の締切日までに、学士を認定する大学評価・学位授与機構へ提出する。後日（概ね 12 月中旬）小論文試験を受ける。それに合格できないと学士号は認められない。一般的な大学における卒業論文の提出期間が卒業年度の 12 月～1 月であることと比較するならば、その 3 ヶ月前に完成していないといけない。分量は、他の一般的な大学学部の卒業論文と同様だろうが、400 字詰め換算で 40～68 枚と規定されている。

上記のスケジュールを考えると、専攻科 2 年後期の開始直後には卒業論文が完成していなければならない。したがって、入学時点からの綿密な計画は必然である。

2011 年開設時から、平日夜間及び土曜や集中講義での開講により、1 期生・2 期生を佐治順子（教育学）・永石喜代子（看護学）の 2 名が担当していた。3 名ずつ在籍し、全員、学士・1 種免許状を授与された。卒業後は、臨時任用等で養護教諭として勤務している。3 期生以降、平日昼間開講に変更した。佐治・永石の指導を参照しつつ、2013 年から大野泰子（学校保健）・川又俊則（社会学）が担当となって新たな体制を始めた。

(2) 修了研究指導の展開過程

専攻科の専攻主任は大野泰子准教授である。学校保健を専門とし、養護教諭の現場経験豊富なベテラン教員である。彼女と共に担当する修了研究という授業は、3 期生 5 名の学生と 2 人の教員で進める演習形式で 2 年間続けている（表 4）。

授業自体は、1 年前後期・2 年前後期の 4 期（各 15 回）とも、週 1 回（90 分）で設定されている。論文指導や報告会・学会発表等の指導は、その授業時間内では到底終わらない。授業以外の平日・土日祝・長期休暇期間など、学生と指導教員で時間を調整し、各研究室および専攻科研究室で対面指導を重ねた。随時、メールを通じた加筆修正他の指導も続けた。

3 期生の指導を例に、2 年間の「修了研究」の展開をまとめておきたい。

まず、1 年前期は、調査研究の方法論の基礎を学ぶこと、および、学界内での議論を確認し、先行研究を批判的に検討するという作法を学んだ。（短大本科 2 年で卒業研究を経験しているが、ゼミ別指導が不統一な部分もあるので）論文とは何か、そしてその書き方はどういうものか自体を改めて学び、自らのテーマを構想することを目標とした。

研究視点や論文の書き方については、テキストを輪読した。類書は幾つもあったが、筆者らが選定したのは、川崎剛『社会科学系の「優秀論文」作成術』である²⁵⁾。修士論文や博士論文、

学会誌投稿までを視野に入れている同書は、専攻科学生が学ぶ範囲を超えている。だが、自分たちが書く卒業論文の延長には、そのような研究があると知っておくことも重要であり、論文の構造に不変のものがあることを理解させる狙いがあった。論文の「型」をマスターすること、各段階の論文への対応方法など、養護教諭として現場で実践研究するときの独習用にも適切だと筆者らは判断した。そして、指導教員たる筆者らの最新の研究成果も披露しつつ、自ら研究することの意義や面白さを授業最初の段階でイメージしてもらった。

この川崎テキスト
と並行して、学会誌
掲載の論文等を読み
進めた。学界内の最
先端の議論・研究を
確認し、同時に、こ
れを批判的に検討す
る力を養うことを目
的とした。学会誌『学
校保健研究』『日本養
護教諭教育学会誌』
『日本教育保健学会
年報』『学校健康相談
研究』『東海学校保健
研究』の最新5年分

表4 修了研究の2年間（3期生の例、1月以降は予定）

時期	授業	研究	発表	その他
1年	4月	テキスト、先行研究	先行研究・テーマ検討	
	5月	テキスト、先行研究	先行研究・テーマ検討	
	6月	テキスト、先行研究	先行研究・テーマ検討	
	7月	構想発表	テーマ構想	教員採用試験一次
	8月	夏期休暇	先行研究検討	教員採用試験二次
	9月		先行研究検討	
	10月	中間報告検討	中間報告準備	中間報告・ パワーポイント(PP)
	11月	調査準備	予備調査	
	12月	調査中間報告	研究構想再考	
	1月	調査中間報告	調査実施	
	2月	春期休暇	調査実施	
	3月		調査まとめ・報告準備	中間報告・PP
2年	4月	論文構想	補足調査	
	5月	論文指導	調査まとめ	
	6月	論文指導、中間報告検討	調査まとめ・報告準備	中間報告・ポスター
	7月	論文指導、学会発表検討		教員採用試験一次
	8月	夏期休暇	論文執筆	教員採用試験二次
	9月		論文執筆・学会発表準備	学会・PP
	10月	論文完成	論文執筆	学会・ポスター
	11月	修正確認、小論文対策		
	12月	冊子完成	冊子執筆	
	1月	最終報告検討	報告準備	
	2月	春期休暇		最終報告・PP
	3月			

を大野が準備し、その中で学生が自ら読んでみたい論文を選択させた。

毎回の授業では、一人が当該論文のレジュメを作成・発表した。参加者全員は一読してから授業に臨み、質疑応答をした。論文や学生のレジュメ・質疑応答について、筆者らはそれぞれの観点からコメントした。1年前期はこの形式で一人2論文担当した。レジュメの作成は、まず筆者が参照例を提示し、以降、毎回、筆者は担当学生とは異なるレジュメ（筆者独自の視点からのまとめと研究方法の参考資料）を示し続けた。

前期終了回で、各自の研究構想を発表した。夏休みに、各テーマの先行研究を徹底的に調べ上げ、批判的にまとめることを課題とし、それを10月下旬に開催される大学祭で「修了研究中間報告会」で発表した（1期生、2期生を踏襲した）。

1年後期から2年前期までが、自らの論文作成の中心的な時期になる。

中間報告会の準備作業を通じて、自らのテーマを設定した後、予備調査・本調査へ進んだ。この3期生は、ちょうど大野が県内のある研究助成金を得られたこともあって、研究テーマによっては、大野が11月下旬に実施した県内すべての養護教諭対象にした質問紙調査のなかに、質問項目を追加設定した者もいる。もちろん、これとは別にそれぞれ独自で調査を進めた。本

科学生の頃から小学校等へ教育アシスタントに行く者も、学校ボランティアをしている者もある。研修会等で知己を得た現職養護教諭の支援・協力もあり、それぞれに調査を進められた。

テーマは夏に構想したものをそのまま遂行できた者ばかりではない。大きな修正をした者、当初見込みとずれが生じ、細かい修正を何度もした者などある。調査を進め、調査報告を聞き、授業で教員・各学生が修正案を出し合うなど、1年後期は各自の1週間の進捗状況の報告・検討で、90分では足りない状態が続いた。

春休みの3月下旬、大野の質問紙調査の「中間報告会」を実施した（写真1, 2）。調査に協力して下さった養護教諭も参加したこの会を経て、論文執筆が本格化した。

大学祭とこの報告は、いずれもパワーポイントを用いた口頭発表だった。パワーポイント作成は、「情報処理研究」および「教育方法と技術特論」の授業で学んでいる（それ以前に、本科2年次の「生活情報処理演習Ⅲ」でも学んでいる）。プレゼンテーションソフトを用いた方法は、様々な部分で応用できる。彼女たちは、自らの研究発表において、より効果的な方法を学んだ。

報告会の質疑応答などを経て、論文をまとめる段階へ進んだ。三重県他の教員採用一次試験は7月下旬に行われる。その1ヵ月前までに、論文のある程度の完成を目指した。6月中旬に開催されるオープンキャンパスの催し物の一つとして「修了研究中間報告ポスター発表」を実施した（写真3）。

「ポスター発表」は学会大会でもよく見られる。1期生も2期生も在学中、東海学校保健学会年次学術集会（9月開催）でポスター発表を行った（同学会では学部学生も発表可能）。3期生もそれを目指し、全員でポスターを制作した。



写真1 中間報告会（2014年3月24日）



写真2 中間報告会（2014年3月24日）



写真3 ポスター（2014年6月14日）

一枚のポスターという限られたスペースに研究をまとめることは決して容易ではない。ポスター制作は、学会等で定められた基準での自由な形式がある。テキスト²⁶⁾やウェブサイトでも様々な方法が紹介されている。今回は、既発表の先輩の形式に準拠し、「目的」「方法」「結果と考察」「結論」と大きく4つに分け、そのなかで自らの研究でわかったこと、そのなかで最も指摘したいことを中心にまとめるようにした(写真4)。当日は、口頭での発表時間も設定し、短大本科1・2年生、授業担当教員、オープンキャンパス参加高校生などがそれぞれ部分的に参加した。学生は、教員などの鋭い質問に何とか応答でき、安堵している様子だった。

この「修了研究中間報告ポスター発表」の後、彼女たちは、教員採用一次試験の試験勉強に集中した。1年次も教員採用試験は受験できるが、彼女たちの目標は、専攻科2年次の教員採用試験である。それぞれが全力を尽くした。

一次試験(7月中旬)を通過した学生は、8月下旬の二次試験へ向かった。修了研究レポート提出の締切も迫っており、一次試験終了直後から(一部は、採用試験前もある程度の資料整理なども進めていたが)論文完成のための準備にあてた。

9月の東海学校保健学会(口頭発表2名)と10月の日本養護教諭教育学会(ポスター発表3名、写真5,6)に分かれ、5名全員が学会発表を経験した。それぞれの学会大会事務局へ抄録を提出した。文字数制限の厳しい抄録作成も初めての経験であり、何度も書き直し、その作業は修了研究での概要作成で役立った。

学会発表前にはリハーサルを繰り返した。質疑応答の問答集を作成し、時間内で終わるために、早口小声になりがちのところ、スピードを調整し大きな声で、口頭発表で画面だけを見るようにならないように、ポスター発表では聴衆者に語りかけるように話すことの大事さなど、それぞれが身につけていった。

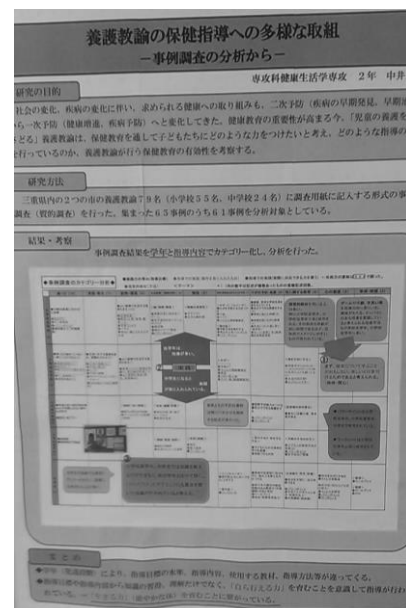


写真4 ポスター発表

(2014年6月14日)

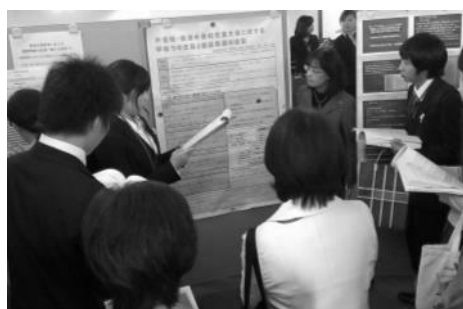


写真5 日本養護教諭教育学会

(2014年10月12日)



写真6 日本養護教諭教育学会

(2014年10月12日)

そして、最終的な修正を重ね、10月初旬にレポートを提出した。この後、大学附属図書館へ収蔵する修了研究冊子を完成させることと、修了研究発表会（今年度は2月7日予定。前年度の様子は写真7,8）がある。12月の小論文試験に向けた準備をし、次年度からの教員採用が決まっている者はその準備、採用試験に再チャレンジする者はその準備と、後期の授業以外にもそれぞれ、既に自らやるべきことを進めている。

10月26日には4期生の「修了研究中間報告会」が、大学祭のなかで実施された。3期生も全員参加し、適宜、口頭で質問し、感想シートには、自らの振り返りを含めながら、それぞれの報告に対し、とても丁寧な感想と助言コメントを記している。

（3）内容と結果

3期生の論文タイトルは次の通りである。

「養護教諭不在時の対応—小学校と中学校の現状から」「養護教諭が行う保健教育の特性」「小中学生の体型意識と身体計測の実態に関する研究」「自傷する生徒への養護教諭の関わり」「不登校・教室外登校児童生徒に対する学校での支援と養護教諭の役割」。

不在時対応、保健指導、健康診断、自傷、不登校、という興味深いテーマを選び、先行研究を徹底的に読み込み、調査対象を選定し、質問紙調査や養護教諭へのインタビューなどの調査でデータを集め、それぞれが考察を進め、まとめることができた。

4. 考察

（1）学びの複線化と多様な研究と貴重な業績

現在、本学のような短大専攻科は養護教諭養成課程の少数派であり、四年制大学の教員養成課程や看護系学部での養成が多数派である。養護教諭免許は、それ以外に、特別別科（看護師免許所持者が1年学び一種免許状）、保健師の都道府県教育委員会申請（二種免許状）で授与される。免許取得の多様性、あるいは養成課程の複線性は、様々な課題が指摘されている²⁷⁾。

さて、社会学者として近い将来、似たタイトルの著作を構想していた筆者にとって、すぎむらなおみ『養護教諭の社会学』²⁸⁾は、「自己エスノグラフィー」という発想とその内容にたいへん興味を魅かれ、重厚な実践研究の一つだと理解している。当然、筆者は別のアプローチの研究となるので、別タイトルで「社会学」を实践していくことになるだろう。刊行された同書をすぐに修了研究で紹介し、学生には各自熟読するよう勧めた。



写真7 修了研究発表会

(2014年3月8日)



写真8 修了研究発表会

(2014年3月8日)

『学校保健研究』掲載論文は、先に確認したように多岐にわたるテーマで、筆者自身それらを読み進め、この分野の最先端のものを学ばせていただいた。長期にわたる縦断研究や、多領域の研究が見られた。だが、これをもって、先の野村の指摘を乗り越え、学界全体が向上したとは言い切れない。優れた研究者や研究が見られる。しかし、学界全体の向上は、学会誌であえて企画された特集の意味を汲んだ人びとによって、今後、優れた研究がより多く提出されることで果たされるのだろう。

（２）養成課程で求められる研究と研究教育

筆者らは、研究を自らできる力をつけることが、養成校において必要な教育だと考えている。

したがって、本学専攻科において、先行研究を調べ、批判的に検討でき、研究テーマを見つけ、幾つかの研究手法を使え、論文等にまとめ、他者に伝えられるように教育してきた。論文を提出し終えた彼女たち全員から、論文執筆や学会発表を経た感想や、後輩への助言の適切さなどから、筆者自身その情報発信力その他の成長を感じ取っている。ただし、それは数値で簡単に示せない。今後、彼女たちが養護教諭として現場に就いたとき、自らの実践研究において示していくことを期待したい。

筆者は、できれば、質的研究・量的研究の双方できることが望ましいと考えている。しかし、方法論を学ぶ時間は少ない。筆者らは修了研究の授業をより有効に活用するために、「データ分析法」という新しい科目を設置した。３期生に対して授業外で教授してきた内容を、新しい授業科目に加え、筆者はその授業を担当している。質的研究・量的研究の方法論の基礎を「分析法」という観点から、すでに４期生に教授している。

筆者自身、まだわずか２年間の取り組みに過ぎない。この分野の幅広さを実感し、改めて、専攻科における研究教育を追究していきたい。

おわりに

筆者の知る限り、現職者研修は救急処置や看護学的知見の教授が中心であり、実践研究に関するものは見られない。研究方法を身につけるためには、年間通じて数多く開催されている学会大会・研究会等への参加が必須だろう。しかし、現職者に参加義務はない。交通費・参加費等を自費で払い、実力を高める意識の高い養護教諭ばかりではないだろう。積極的に行っていない人びともいる。その人びとには、実践研究が自身の重要課題だとは思われていない。

誤解がないことを願って付言するが、筆者は、専門社会調査士あるいは教員免許状更新講習の講師経験者、養護教諭養成課程の修了研究担当者として、現状の養護教諭の実践研究の状況にやや課題があると感じ、ささやかな指摘をしたに過ぎない。当然、専門外の勘違いもあり得る。批判を頂戴するのは免れ得ないと思いつつ、だが、子どもたちの健康のことを一番に考えて行動している現職の養護教諭の方々に、この現実を改めて理解して頂き、できれば多くの方々とこの問題を共有し考えていきたい。タイミングが合えば一緒に調査研究したいと思っている。

これから誕生する養護教諭（多くの教え子がそうなることを期待している）の方々には、ぜ

ひ、実践研究の方法を学び、そして、自らの教育現場で、多くの実践研究をしていただき、新しい知見を私たちに提供していただきたいと切に願って筆をおきたい。

謝辞

匿名の査読者へは適切な助言に御礼申し上げます。『学校保健研究』検討の作業補助をしてくださった専攻科浦野早都紀さん、写真掲載等も快く許可いただいた3期生の中井彩乃・永原あゆみ・引田郁美・藤井咲衣さん、一緒に修了研究を担当している大野泰子先生には、この2年間、筆者自身が新たに多く学べたことを含めて、改めて、心より深く感謝します。

引用文献

- 1) 秋葉昌樹 (2004) : 教育の臨床エスノメソドロジー研究—保健室の構造・機能・意味, 東洋館出版.
- 2) 森昭三 (1991) : これからの養護教諭—教育的視座からの提言, 大修館書店.
- 3) 森 (1991) : 同上, 257.
- 4) 後藤ひとみ (1999) : 養護教諭と研究, (大谷尚子他, 養護学概論), 東山書房, 213-227.
- 5) 小倉学 (1970) : 養護教諭—その専門性と機能, 東山書房.
- 6) 「養護教諭の養成教育のあり方」共同研究班 (1999) : これからの養護教諭の教育, 東山書房.
- 7) 大澤功 (2012) : エビデンスを考える, 学校保健研究, 54, 79-83.
- 8) 鎌田尚子 (2012) : 研究を始める—研究を始めたくなるきっかけ (動機), 学校保健研究, 54, 178-182.
- 9) 中垣晴男 (2012) : 文献を集める、読む, 学校保健研究, 54, 260-266.
- 10) 島井哲夫 (2012) : データを集める, 学校保健研究, 54, 345-349.
- 11) 戸部秀之 (2012) : データを分析する(1), 学校保健研究, 54, 449-455.
- 12) 高倉実 (2013) : データを分析する(2), 学校保健研究, 54, 528-533.
- 13) 岡田加奈子 (2013) : 質的研究, 学校保健研究, 55, 61-64.
- 14) 高橋浩之 (2013) : 結果を吟味する—論文における「考察」の考え方, 学校保健研究, 55, 161-165.
- 15) 野津有司 (2013) : 研究を発表する, 2013, 学校保健研究, 55, 254-258.
- 16) 辻本悟史・ニールセンニューロフォーカス (2013) : 英文を読む, 学校保健研究, 55, 334-338.
- 17) 川畑徹朗 (2014) : 良い研究者になろう, 学校保健研究, 55, 536-540.
- 18) 岡田加奈子・佐藤都仁子 (2004) : 学校保健関連誌に占める質的研究の割合と特徴 (1997—2002) —学校保健研究、日本養護教諭教育学会誌、日本教育保健研究会年報の比較、日本教育保健学会年報, 11, 39-49.

- 19) 野村和雄 (1987) : 学校保健における統計処理—研究論文にみる統計処理, 愛知教育大学研究報告, 36 (教育科学編), 215-219.
- 20) 野村 (1987) : 同上, 217.
- 21) 太郎丸博 (2014) : 統計・実証主義・社会学的想像力, 現代思想, 42(9) , 110-111.
- 22) 太田静江 (2014) : 今後の指導方法構築のための卒業研究論文の内容分析, 帝京短期大学紀要, 18, 33-40.
- 23) 川又俊則 (2014) : 養護教諭養成校がなぜ放課後児童指導員を養成するのか, 生活コミュニケーション学, 5, 22-30.
- 24) 学童保育指導員研修テキスト編集委員会編(2013) : 学童保育指導員のための研修テキスト, かもがわ出版.
- 25) 川崎剛 (2010) : 社会科学系のための「優秀論文」作成術—プロの学術論文から卒論まで, 勁草書房.
- 26) 酒井聡樹 (2013) : これから研究を始める高校生と指導教員のために—研究の進め方・論文の書き方・口頭とポスター発表の仕方, 共立出版.
- 27) 池上徹 (2006) : 養護教諭養成研究の境界性と可能性, 関西福祉科学大学紀要, 10, 19-29.
- 28) すぎむらなおみ (2014) : 養護教諭の社会学—学校文化・ジェンダー・同化, 名古屋大学出版会.

執筆者の所属と連絡先

所属 : 鈴鹿短期大学 Email : kawamatat@suzuka-jc.ac.jp

Practical studies of Yogo teachers and education of research in the training course

a study of research methods and conference presentation

Toshinori Kawamata

Summary

Some Yogo teachers conduct practical studies, and some offer presentations or publish papers. However, some of them make us wonder if they use unbiased methods or if their analyses are appropriate. The basis of research definitely needs to be taught in teacher training programs. In this paper, I self-reflected my research and teaching to students that I actually practiced. The students learned research methods through textbooks, critically read previous studies and explored their own themes. They offered oral presentations using Power Point and poster presentations four times during a year and a half, and improved their abilities in expression and information transmission. Their interest in school education and health education increased further through writing graduation thesis. The importance of conducting practical studies and improving expressiveness for Yogo teachers was reaffirmed.

Key Words: practical studies, Yogo teacher training course,
conference presentation , information transmission, research methods